

阿久悠

殺人狂時代ユリエ

KADOKAWA NOVELS

美少女歌手ユリエに何が起ったか? 現代の
狂気。破滅への序曲。戦慄のニュー・オカレ
サスペンス! 第2回横溝正史賞受賞作

角川書

KADOKAWA NOVELS

殺人狂時代ユリイ

阿久悠



ガドカワパブルズ

昭和五十七年三月二十五日初版発行

著者 阿久悠 あくゆう

発行者 角川春樹

さつじんきょうじだい
殺人狂時代 ユリエ

印刷所 旭印刷株式会社

製本所 本間製本株式会社

装丁者 岡村元夫

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二二三 振替東京三一九五〇八

電話東京三九五二二大代表 二一〇三

Printed in Japan 落丁・乱丁本はお取替えいたします

0293-772201-0946(0)

目次

華氏百度の夏

第一章

サムライ・ピアニストは
留置場にいた

9

十四歳の誕生日に

第二章

ユリエは
無邪気そのものだった

65

美少女のうたった歌は

第三章

さだめのように川は流れる
であった

113

信じられますかと

第四章

その男はいった
事実なんですよと

158

第一章 華氏百度の夏

サムライ・ピアニストは
留置場にいた

1

アメリカの片田舎の、その留置場には、阿波地明あわぢめいの他には誰もいなかった。

そういう意味では、のうのと眠ることができた。

あの、よくある儀式、先住者に対する挨拶や、何の罪で入って来たかを卑屈に説明するめんどろはしなくすんだ。それに、体臭が明らかに違う大男たちと並んで眠るといふ、おぞましさも避けられた。

それはありがたかったが、ここにブチ込まれているのが彼一人だという経過に関しては、少々納得しがたいところもあった。

その前夜、その町の古びたナイト・クラブで、パトロール・カーが駆けつけるような喧嘩けんかをして、彼は逮捕されたのであるが、喧嘩というからには相手があることであり、しかも、十人やそこらは相手にした記憶がある。要するに、それらはすべて土地の人間であり、いわば身許みもとも確かということで逮捕をまぬがれ、正体不明の日本人である阿波地明だけが泊められたということであろう。

そういえば、現場へ、パトロール・カーの警官が到着した時、いままで喧嘩の相手であった男たち——いわば当事者までもが、いっせいに阿波地を指さし、逮捕を要請していた光景を思い出した。彼らにいわせれば、あれは喧嘩ではなく、不法な侵入者の鎮静に努めていたということになるのかもしれない。

いわば、警察が到着するまでの警察力の代行行為であったとも告げたのかもしれない。それが認められての、阿波地一人の逮捕ということになったのである。

しかし、そんなことは、阿波地明にとってはどうで

もいいことであつた。安宿に泊ろうが留置場に泊ろうが、気分としてはさしたる違いもなく、洒落^{しゃれ}ていえば、シャワーがあるかないかの差ぐらいである。

留置場が大きいのか小さいのか、また、設備がいいのかどうかということは、阿波地にはわからない。日本でも、アメリカでも、とにかく初めての経験である。

阿波地は日本を出て、アメリカを放浪するジャズ・ピアニストであつた。ロスアンジェルスのエージェンツトから、仕事をもらつてこの町へ来ていた。

連行されると、バスポートをチェックされ、少々の持ち物を取りあげられて、事情聴取もなく、文字通りブチ込まれた。事情聴取が行われなかったのは深夜のせいであるかもしれないし、また、それほどのもなく、少々頭を冷やさせばいいということであつたかもしれない。

毛布が一枚投げこまれたがそれを使う必要もなかった。何しろ日中は華氏で百度を越す暑さであつたから、夜になって急激に温度が下る自然条件にある土地とはいえ、充分ごろ寝に耐えられた。

それに、毛布には獣じみた体臭がたつぷりとしみついており、とても鼻腔^{びこう}にあてがって平然と眠るというしろものではなかった。阿波地はそれを折りたたむと枕にし、すぐに躰^{からだ}を丸めて眠ってしまった。

阿波地明は、夜中に何度も目を覚ました。そのころになつて、躰のあちこちの打撲が痛み出したのである。さわつてみると躰中が熱をもっていた。馬鹿な話だと阿波地は思った。

明け方には夢を見ていた。

それは寝苦しさと思苦しさがしほり出したような現われ方で、もしかしたら、うなされていたかもしれない。奇妙に喧嘩とか留置場といった現実の衝撃が神経に投影した夢ではなく、阿波地の潜在的な飢餓を刺激するようなものであつた。

ほんの少し前まで、彼は毎夜のようにその夢を見、それはある意味では祈りのようなもので、阿波地明という男の生きる執念の糧^{かて}ともなつていたものであるが、ここ何カ月か不思議なほどに忘れていた。

その夢を見た。

夢は確かに真赤な色彩を記憶に残すもので、その真紅の波瀾のなかでもがいている、正田玲子の姿をはっきり見たように思う。いつものことながら、正田玲子は片方にだけ白いハイヒールをはき、阿波地に手をのばして救いを求めている。

目を覚ますたびに、今身を置いているところが何処であるのかわからなくなっていた。その都度、留置場のなかであると納得するのに時間がかかった。

その次に目を覚ましたのは起こされたからで、もうすっかり朝になっていた。

起こしたのは、中年の頭の禿げ上った警官で、怪我でもしているのか左脚をひきずっている。典型的な保守的アメリカ人というタイプで、州の外には戦争でもない限り出て行かないという顔をしていた。

珈琲の香りがただよい、古臭いカントリー・ウエスタンの音楽が流れていた。

珈琲は、警官が驚づかみにしているモーニング・カップから立ちのぼるもので、粗雑ではあるがそれなりに心をひく香りであったし、音楽は、警官の足許に置

かれたラジオから聴こえ、いや応なしにアメリカの片田舎にいたのだという感傷を誘うものであった。

「派手にやったそうじゃないか。町じゃ、パール・ハーバー以来の出来事だと騒いでいるぞ」

警官は、阿波地がなかばうつとりとした目で見つめている珈琲を驚づかみのまま飲みほすと、妙にしゃがれた声でいった。そして、ディレクター・チェアーに似た椅子を持ち出し、鉄格子の部屋にきちんと対面させて腰を下した。どこかに軽い自閉症気味の気質があると見えて、足許のラジオも、椅子と平行に鉄格子と直角になるように置きかえたりする。ひきずっていた左脚は、やはり痛むのか棒のように投げ出していた。「何時出してもらえる？」

阿波地は軀を起こすと、欠伸を噛み殺しながら訊ねた。「え？ 何時？」

「話がよく伝わらなかったようだ。パール・ハーバー以来というのはジョークじゃないぞ。簡単にはいくまいよ」

「まさか。只の喧嘩だ」

「そうは聞いていない」

「あんたがどう聞いたか知らないが、事實は只の喧嘩だ。ひどく子供じみたね。しかも、俺は喧嘩を売られた方だぜ。いわば、被害者だ」

「見解の相違ってやつだな」

警官は事もなげに面白い、先の曲った紙巻煙草をゆっくりと引き伸ばしはじめた。

「相違もへちまもあるか。第一、見解なんて上等のものが、あんたたちにあるのかい」

阿波地は、悪い癖だと思いつながら、カッと来るものをおさえきれずに毒づいた。昨夜のナイト・クラブでの無謀な稚気の興奮が、寝不足の頭にまだ残っていたのかもしれない。

となりながら、しまったと思っていると、案の上、警官の表情に激しい変化が起き、右脚をのばして鉄格子を蹴った。

「若い。元気がいいのも考えものだぜ。ここは可愛くふるまった方が得じゃないのか。お前さんに有利な証言を集めることは、砂漠に湖をつくるより困難

だらうよ」

阿波地明は思わず息を吞んだ。

警官のしゃがれ声の恫喝（どくわ）にひるんだということではない。彼の言葉の内容のもつ意味の恐さを感じたのである。

まさに、彼のいう通り、この町の住人が、日本人の阿波地に有利な証言をするということは、どう考えてもあり得ようはずがない。それどころか、ほんのささいな喧嘩が、事件の形をつくっていけばいくほど、悪意の推測がとんでもない証言をひき出すことも考えられる。未解決の小事件ぐらい押しつけられるかもしれない。

そんなことになってから嘆いてもはじまらない。今のままなら、少々の報復の意味での留置であって、罪に問われるということもあるまい。寝て釈放を待った方が得かもしれないと、阿波地は興奮した頭を冷やすことにした。

「珈琲は？」

警官がいった。

「え？」

「珈琲だよ。罪人とはいえ朝飯ぐらいは与えないとな」

「貰おう」

警官は、阿波地が鉄格子の間からさし出す手にカップを持たせ、しぶきをまき散らしながら珈琲を注ぎ、
「日本人が嫌いなんだよ。ソニーも、ホンダもな」といった。

「俺には関係がない」

阿波地は答えた。

答えながら、言葉の半ばからは珈琲を飲んでいた。紅茶のように薄く、カップの底が透けるような珈琲であつたが、熱さだけは極上だつた。喉から胃袋へと熱い刺激が流れこむと、ようやくにして愚かな一夜が明けたと思つた。

阿波地明は鉄格子にもたれて立っていた。

警官もなぜかそれに身を寄せるようにして立っていたが、こうして見ると大男だつた。百八十センチの阿波地よりはるかに大きく、幅となると問題にならなか

つた。その巨体が左脚の故障のせいかな傾いている。傾いた軀をそのまま鉄格子にあずけ、阿波地をにらんだ。
「ホンダのバイクを買って来た息子をはりとばしてやつたよ。日本の車なんかを嬉しがって買うなつてな。少しは誇りを持っていてやつたんだよ。それで、どうなつたと思う？ 親父が大切な、ホンダが大切かつて二者択一をせまる騒ぎさ」

「で？」

「そりゃあ、ホンダだつて息子のやつがいいやがつた。まあ、それはともかく、日本は嫌いだ。日本人もな」

「その脚は？」

「何だつて？」

「その脚は息子が傷つけたのか？」

「馬鹿をいえ。俺の息子はそこまで出来は悪くない。

ただ少々浮かれているだけだ」

警官は少々むきになつて阿波地の言葉を否定すると、また椅子に腰を下した。軀が揺れるたびに煙草の強い匂いがする。警官の巨体が丸まって妙に気弱に見えたが、それは、ほんものの嫌悪のようにも思えた。

「なあ」

と阿波地は警官に声をかけた。

「何だ？」

「あんた、名前は？」

「訊いてどうする？」

「どうするって、こうやってしばらくは向い合っているんだからね。名前ぐらい知っておきたいじゃないか。

俺だって阿波地明ってのが名前で、ソニーでも、ホンダでもない。え？ 名前は？」

「スチーブ・カーク。でも、気安く呼びかけないでくれ。間違っても、スチーブなんて、慣れ慣れしくはな」

「わかってる」

「もうすぐバンが来る。その時、珈琲のお代りをあげよう」

「ありがとう。で、俺は、何時出られる？」

「さあね。俺の役目は、こうやってお前さんをにらんでいるだけだから」

阿波地は二度三度うなずくと留置場の隅に戻り、コ

ナリーに背中を押しこむようにして膝をかかえた。

煙草を一本リクエストしてみたいと思ったが、珈琲のお代りの約束を取り消されそうなのでやめにした。

焦っても仕方がない。向うの都合に合せなければならぬとするなら、なるべく神経の消耗を少くして、ゆるやかに水のように対処した方がよさそうだった。

目を閉じるとすぐに眠れそうな気がした。

カントリー・ウエスタンの土臭い歌が、煙草の匂いと一緒に流れこみ、スチーブ・カークという警官の右脚だけの間のびしたステップが、時折それによまじって響いた。

アメリカなんだと、阿波地明はいまさらながらに思い、そして、睡魔が彼をしぼり上げるぎりぎりのところで、日本を出てから二年になると考えていた。

2

阿波地明が、正田玲子とどうして知り合ったかという事で思い出すことはほとんどない。至極ありふれた出会いで、徐々に厚味を増していった愛情だから劇

的要素に欠けるということもあるが、それよりも、正田玲子を失った時の印象があまりにも鮮烈で、生々しかったためといった方がいいたろう。

男と女が、愛し合うという形の上で積み重ねて来た多くの感情や、計算や、幸福や、希望や——具体的に言えば、夢のような性的行為や、小鳥のさえずりにも似た他愛ない日常の会話や、時にこれ以上の平凡さはないと感じる生活設計や、そして、近くでは呪文のように口にしていた結婚という言葉や——それらのすべてが記憶の陥没にあったかのように稀薄になつてしまひ、玲子が生命を奪われた時の危機的瞬間だけが色鮮やかな断面図のように残っている。

正田玲子が死んだ日は——いや、阿波地明は殺されたと信じているが、その真偽はともかく——東京に早目の冬が訪れたと感じる十一月の半ばで、雨が降っていた。

雨が早目の冬を感じさせたのかもしれないが、前日まで摂氏十五、六度はあった気温が十度を割り、北欧の冬のように陰鬱で、昼さがりにはもう灯りが必要な

くらいに暗かった。

大都会は日光の照射が薄まると、突然透明感を失つた濃密な空気にふさがれる。汚れた絵具が部厚く混り合つたような風景が沈んでいたと、阿波地は覚えてゐる。もしかしたら、彼の感情がそういう色彩を記憶させたのかもしれないが、それはともかく、実際でもその日は寒かった。

阿波地明は、悲劇は突然に訪れるという陳腐な言葉の、陳腐さ故の説得力の強さをこの時ほど感じたことはない。

予測できなかったから突然に思えるのは当然であるが、そのほんの少し前にながつている時間が、いわば幸福の絶頂であつたのだから、その落差ははかりしれない。死角にあつた悲劇が突然顔を出したという驚愕に加えて、運命の裏切りともいえるものが増幅作用を起こしたのだから、阿波地明が受けた心の衝撃は他人に説明し難いほどのものである。

彼は、その直前まで幸福だつたし、正田玲子も同じく幸福だつたと信じていたのだ。

その他愛ないほどの幸福感から、暗澹たる悲劇の顔を見るまでに十五分と過ぎていない。たった十五分の間に運命のプログラムが、何故に組み替えられたのかと阿波地は思うのである。

マンションの管理人が、連統的にチャイムを鳴らし、それでも伝わらないと思うのか、鉄の扉を乱打して、「ひき逃げです。あなたのところへよく見えてたお嬢さんが、車にひき逃げされました。早く」

と報らせてくれる瞬間まで、阿波地明は、正田玲子と過した気恥しくなるほどに開放的な時間の余韻の中に浸っていた。

「まさか」

と阿波地はいった。「そんな馬鹿な。玲子は、たった今まであんなに元気だったのに」

その言葉が、まったく人違いの説明をする上での無意味な言葉だと気がつかないくらい、彼は呆然としていた。

「まあ、とにかく。私の見間違いだったら、こんなにいいことはありませんよ。急いで下さい。雨が降って

ますからね。それに、真冬のように寒いですから、何かを着て。本当に私の早とちりならいいんですけど」管理人が突然自信なげにいいはじめたのを聞いて、阿波地は頭の中が冷静に組み立てられて行くのを感じた。

「報らせてくれて、ありがとうございます。すぐに行きます」と落着いた声でいった。

「下で待ってますから。一一〇番は私がかけました。もちろん、それよりも前に救急車の手配をしました」

「あなたが目撃を？」

「いえ、通行人です」

「そうですか。すぐ行きます」

阿波地明は、その時、シャワーを浴びたばかりの素肌に、バスローブを着ただけの姿だったが、急いでコトンのズボンをはき、薄でのセーターと皮ジャンパーを着こんだ。

鉢の芯までぬくもっていたのが、一瞬のうちにふるえが来るくらい冷くなっていた。

蝶のようにとびかい、粘液質の花弁のように吸いつ

いていた玲子の唇の感触も、いつの間にか肌から消えていた。

正田玲子がひき逃げの奇禍にあったのは、マンションを出て五十メートルも行かないところだった。

マンションは、麻布の交叉点から渋谷へ向う道路から、ビル三軒分奥まったところにあったが、玲子は通りに出る直前のところで、この不幸にあった。

阿波地明が氷雨のように不快な雨にうたれながら現場に駆けつけたのと、救急車の到着とはほぼ同時であった。

日常は滑稽にさえ響くサイレンの音が、引き返せない悲劇の幕開けの序曲のように思えたし、回転する赤色灯が雨滴を瞬間的に染めるさまもおぞましかった。

担架を持ち出した救急隊員が、電柱にもたれかかるようにして投げ出されている正田玲子の躰をかかえ上げようとして、

「これは」

といった。そして、彼らを取り囲んでいる目撃者とも野次馬とも、また阿波地のような関係者ともつかぬ

一団を下から見上げるようにして、

「一一〇番へは？」

と訊ねた。

「私がしました」

マンションの管理人が答えた。

そうですかと救急隊員は答え、同僚に向かってかすかに首をふった。それは、正田玲子がすでに負傷者ではなく死者になっているということであり、管轄が消防署から警察へ移行したことを意味していた。

阿波地明は、ゆっくりと人をかきわけて前に出た。

それは、このような場合によく見られる激しい感情の昂ぶりの光景とは違っていた。

「玲子」と名前を呼ぶこともなかった。濡れそぼった道路に膝をつき、かき抱きながら泣くということでもなかった。

「靴が」

と阿波地はいった。

「え？」

と救急隊員が訊き返した。

「靴が片一方しかない」

正田玲子は見ようによつては、電柱を抱きかかえているようにも見えた。首が折れ曲つてゐるが、目は閉じ、唇はかすかに開いている。Sの字にくねつた軀は、衝撃を受けて生命を絶たれたにしては余りにもやわらかな姿態であつたが、確かに玲子は死んでゐた。そして、阿波地明が半ば痴呆状態の思考で氣にとめたのは、白いハイヒールが脱げて、近くに見当らないことであつた。

雨が降りつづいてゐた。

寒さを感じなくなつてしまつた玲子の軀を、容赦なく濡らしてゐた。ストッキングの足裏が上向きに見えるのは、エロチックでさえあつた。

阿波地明はハイヒールを探した。何故そんなことをするのかわからないが、奇妙に氣になつて仕方がなかつた。

ハイヒールは、はるか前方の、スナックの店前に置かれたビールの空瓶のかげに、形をくずして転つてゐた。

それを手にした時、初めて阿波地の胸に現実的な怒りと悲しみがこみ上げ、「玲子」と叫んだ。

パトロール・カーが遅れてその時到着し、阿波地の軀は玲子からひきはなされた。

幸福という幻影はそんな簡単なことで姿を消した。ほんの十五分前まで、濃密な匂いで部屋中にたちこめていた幸福感が、全くもつて前後のつながりを失つてしまふなどということは信じられないことだつた。

3

「何を考へてゐる？」

スチープ・カークと名乗つた警官が声をかけた。相変らず鉄格子の部屋に對面する形で椅子に腰を下してゐる。目をこすりながらしゃべつてゐるところを見ると、彼もまた居眠りしてゐたのかもしれない。阿波地明も眠つてゐた。

「別に。何も。不法拘禁で訴へる方法はないかとチラと考へてみたが、それも賢い方法じゃないのでやめた。今は、何も考へてゐない」

阿波地はそう答えた。

「さっきのマクドナルドはどうだった？ あれは俺の

少々の好意だぜ」

「何故？ あんたが俺に好意ってのはおかしいじゃないか。日本人だぜ、俺は」

「素直になれよ。本心はともかく、ちょいとめんどろみみたい気分になるってことがあるだろうが。そういうもんだよ。退屈しのぎに好意を示すってこともあるさで、どうだった？ 味は？」

「うまかったよ」

阿波地がそういうと、スチーブ・カークは、そうだろうとなすいた。単純で、どこか孤独な男であるらしかった。

「退屈なのか。あんた」

「退屈だね。こりゃあ警官の仕事としちゃ最低だ。員数外だ」

「はずされたのか？」

「脚のせいだよ」

「なら、いいじゃないか。怪我がなればどうってこ

とはない話だ」

「そうだな」

スチーブ・カークは、自分自身を納得させるためにうなずいたが、どうやらそれだけが理由で第一線をはずされているのではないと阿波地には思えた。息子にコケにされ、怪我をし、警察でも一線から外されているというのは、無能のせいなのか、性格的なものかわからなかったが、余り好ましくない警官と顔つき合せているのだなという思いを、阿波地は感じていた。

「俺は、他人を思いきりぶっとばしたくて警官になっただけだ」

「物騒なことはいわないでくれ」

「アメリカの警官ってのは、みんなそうだぜ。いや、誰も彼も他人をひっぱたきたいのよ。ひっぱたいて罪にならない職業なので警官を選ぶわけさ」

「うさ晴らしに撲るのだけはやめてくれ」

「わからんぜ」

スチーブ・カークは、薄笑いをうかべてそういいながら、足許のラジオのボリュームを上げた。

相変らずウエスタンの曲が流れていたが、朝方のような古典的なものではなく、比較的新しいもののように思えた。

あんたの許婚者に恋した俺は

ひそかにあんたの戦死を願っている

美しい女を他人の手に委ねるなんて

あんたの人の良さがすべての罪なんだ

と、それほどかん高い声ではなく、むしろ、しんみりとした調子で歌っている。スチーブ・カークは、だらしなく椅子に身をたせかけて、うっとりとした感じで聴き入っていた。

「好きなんだよ。この歌が」

「いい歌だ」

と阿波地は話を合せた。

「ミュージシャンなんだって？ ピアニストだった？」

「そうだ」

「ホンキートンクか？」

「いや。モダン・ジャズだ。セロニアス・モンクみた

いな」

「知らんな」

阿波地明はそれ以上の説明はしなかった。しても仕方のないことだった。適当な話題がなくなって来たので、

「息子はどうした？」

と訊ねた。

「何だって？」

「あんたの息子さ」

「そのうち、ホンダと一緒にグチャグチャになって見つかるだろうさ。馬鹿なやつさ」

「あんたの息子の気持がわかるな。多分、あんたが誰かをぶっとばしたいのと同じ思いだし、相棒としちやホンダは魅力的だ」

「わかったようなことはいうな」

スチーブ・カークは椅子から腰を上げ、顔中に浮き出た汗をタオルほどもあるハンカチで拭いながら、

「また百度をこえたな。こんな日にはアメリカ中がいらいするんだ。お嬢ちゃんみたいな大統領のせい

もしれない。お前さんも、無事にここから出るつもりなら、いらいらに巻きこまれないように利口にふるまうんだな。可愛くよ」

しゃがれ声をなおさら押し殺しながらそういった。

阿波地明は、ああと答え、汗が噴き出してきた顔をなげた。不快な粘りの奥に伸びてきた髭がザラリとさわった。

正午近くになっている筈だった。

白い蒸気を吐きそうな砂漠の光景が目には浮かび、一本だけ走っているフリー・ウェイも曲りそうになっているのだらうと思えた。

だが、阿波地明には、何も進行しそうになかった。警察署は眠ったように静かだった。

4

恋人が死んだということは、感傷に浸るに充分の条件であった。せきとめられた激情が胸の入口あたりで噴出を待っているような思いは、そして、悲しみという妙に冴えざえとした情感に頭のどこかをしびれさせ

ているという気分は、恋人の死以外では味わえない。

正田玲子が、目の前といってもいい近くでひき逃げにあり、あっけなくこの世を去った時の阿波地明がそうであった。痛いような悲しみに恍惚としていたといっている。不思議ないい方だが、その直後の阿波地は悲劇という甘い酒に酔っていたといっている。

冷静に考えれば、それもまた呆然自失の変形であったかもしれない。

たとえば、何万本かの針を組み合せて塔を作るというゲームに夢中になっていた時、最後の一本で砕け散ってしまった幻の塔を見つめる思いに似ていた。崩壊の嘆きより、何万本かがとび散る時の、スローモーションに舞う針の美しさが残像として残る感覚である。

現実には、そんな男特有の感傷的な幻想を許してくれるほどロマンチックではなかったが、それはそれとして阿波地は、警察の事情聴取にも積極的な協力もしたし、玲子の勤務先、家族らへの連絡やら処置もテキパキと果した。

しかし、そのことと陶然とする感傷とは別物だった。